

はじめに

著者	庄司 博史, 金 美善
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	64
ページ	1-3
発行年	2006-12-28
URL	http://hdl.handle.net/10502/00009457

はじめに

庄司博史・金 美善

国立民族学博物館(民博)では、2004年3月25日から6月15日まで約70日間にわたり、特別展「多みんぞくニホン—在日外国人のくらし」を開催した。特別展の実行委員会(プロジェクトチーム)は、2002年12月に正式発足したが、すでに同年6月、発案者である庄司は特展準備会を非公式に立ち上げ、呼びかけに賛同した、主に民博外部の約20名のメンバーとともに企画立案に入っていた。この特展準備会はその後も特展が始まるまで、ほぼ月一回開催され、展示の実現に向けて、具体的な構想から資料の収集にいたるまで、民博のスタッフとともに実質的な作業をおこなった。このような準備と並行して、いくつかの点で日本ではおそらくはじめての試みである、在日外国人にかかわる展示を研究面で開発し、サポートするために、2003年4月、民博共同研究「在日外国人と日本社会の多民族化」を特展準備会とほぼ同じメンバーで発足させた。本書は特展プロジェクトメンバーを中心としてこの共同研究にかかわった人びとによる報告書である。

この特展は在日外国人に焦点を当てた、そして主張をもつ展示であったことのほかに、いくつかの点で新しい試みであった。企画から収集まで担当したプロジェクトチームにはコミュニティのメンバーが深くかかわっていたが、企画構想の段階では展示資料はまだ手元にも、コレクションとしてもほとんど存在せず、個人から借用することになったこと、証明書、インタビュー、手紙などに個人名、写真をそのまま展示したことなど、ほとんどのメンバーにとって、このような展示にかかわることは、はじめての経験であった。特展のプロジェクトと並行した共同研究「在日外国人と日本社会の多民族化」では、特展の趣旨である日本の多民族化が、それぞれの担当する分野でいかに進行中であるか、それをいかに展示しうるか、どのようなサブテーマをたてるか協議すると同時に、このようなマイノリティの個人情報や主張をいかにあつかうかという問題についても考えてきた。その意味でプロジェクトメンバーにとって特展への参加は同時に研究でもあった。

本書は、メンバーがそれぞれ特展と共同研究にかかわったほぼ2年間に、展示の担当分野において、なにを目的とし、いかなる結果をえたか、そして課題としてなにを残したか、についての報告である。特展のプロジェクトチームのメンバーリストと役割分担は本書巻末にあげた。

本書の第一部は、主に特展場1階の導入部分において、コミュニティ横断的で、外国人全般にかかわるテーマを担当したメンバーによる、特展の成果を踏まえた上での批判的論考である。まず、プロジェクトチームの実行委員長であった庄司が、諸論文に先

立ち、特展の基本構想の立案者の立場から、特展立案の背景や目的、手法について説明する。さらに、庄司の次の報告では、特展の性格にかかわるいくつかの基本理念および用語・概念に関して、若干の問題性の存在を認識しつつも、あえて採用した事情を説明する。樋口直人は、「多文化」のあつかい、およびトランスナショナルな動きに関して自己のエスニック・ビジネス研究と特展との視点のズレを指摘した。エスニック・メディアのコーナーを担当した中野克彦は展示の資料集と分析を通じ今後のエスニック・メディア研究の課題について考察している。中国帰国者の子どもたちなど、日本語能力の不十分な子どもたちへの日本語指導教室を担当した城田愛はその展示の場をとおして子どもたちの揺れる民族意識をえがこうとする。つづく島村恭則は、特展では理念の中心であった「多民族性」の理解において、階層性、地域性がさまざまな形で入り組み、構成する社会の多様性の総体という観点が見落とされがちであったと指摘し、今後の多民族展の可能性とその課題についてのべる。また小谷幸子は、北米でのフィールドワークでみた社会的弱者といわれる人びとが自己の多様性の主張において矮小化された文脈のなかで見られがちな事実を、特展の子ども展示における、イデオロギー化された弱者の表象のありかたに反省をもって投影してみせている。

第二部では、エスニック・コーナーの担当者が、それぞれのコーナーについてさまざまな問題意識とエスニック・コミュニティとのかかわりをもちながら展示を実現した経緯について述べている。ここで執筆を担当したのは、在日コリアン：藤井幸之助、金美善、前田達朗、在日ブラジル人：リリアン・テルミ・ハタノ、在日中国人：張玉玲、陳於華、佟岩、南誠、在日ベトナム人：北山夏季である。実際にエスニックグループにかかわる多くの資料の収集とインタビュー、そして展示法に関わる問題に相当の時間と労力を割かざるをえなかった部分、論述は多少それらの記述にもむけられている。と同時に初めてのエスニック・コミュニティ展示においてメンバー各自が主張しようとした思い、さらに展示やインタビューをとおしてもたらされた知見や指摘された今後への課題は、特展の開催にならぶおおきな成果であるといえる。

第三部は、本特展メンバー以外の執筆者によっている。田嶋淳子氏には、特展の背景でもある日本の多民族化の過程に関し、エスニック・コミュニティ形成の観点から共同研究「日本の多言語化現象に関する総合的研究」（代表：庄司博史）の成果の一部を寄稿していただいた。博物館の学校教育への応用に積極的に取り組んできた織田雪江氏は、本特展の理念をいかに授業にとりこみうるか、その実例をもって報告している。またタイ・エイカ氏は、日本の多民族化についての初めての展示である本特展に構想段階から強い関心をもって注目してきたが、その中心的な理念である多文化のあつかいについて批評する。以上三名に厚く感謝したい。

なお、各報告でも明らかになるが、本特展は、資料の貸与はいうまでもなく、情報や助言にいたるまで、数多くのエスニック・コミュニティの組織や個人の協力なしでは決

して実現するものではなかった。重複をさけるため各報告での謝辞は極力避けざるをえなかったが、ここで特展プロジェクトチームを代表して、心からの感謝の念を記しておきたい。また、特展プロジェクトメンバーの中には諸般の事情で本報告書に寄稿できなかったものもいるが、展示への参与という面では他のメンバーに決して劣るものではなかったことはいうまでもない。

2006年9月15日